

## 部活と『聞く力』

留萌市立病院 循環器内科  
あいはら ひろき  
相原 宏紀

日に日に寒さが募る季節ですが、皆様におかれましては益々ご健勝のことと存じます。初めてご挨拶させていただく方も多いことと存じますので、まずは自己紹介をさせていただきます。2020年に旭川医科大学を卒業し、現在留萌市立病院 循環器内科で後期研修をしております、医師3年目の相原宏紀と申します。現在は上級医のサポートのもと、医師として命を預かる重みを感じながら、日々研鑽に励んでおります。本企画の紹介をいただいた南部湧大さんは高校からの同級生であり、研修も旭川医科大学で同じでありましたので、かれこれ10年来の仲となります。そんな頼れる同期からの紹介ということで、喜んで引き受けた次第です。

さて、専攻医として働きはじめ、医師ひとりでは何もできないな、とより強く感じるようになりました。多職種との連携や患者家族まで巻き込んだチームとしての介入が必須で、少ない外来時間や回診時間の中で、どのように患者および家族の話を聞いていくか、というのは勿論、コメディカルにしか見せない顔や意見を拾い上げてどう診療に活かしていくか、というところも難しさとして感じているところです。方針を最終的に決めるのは患者および家族ではありますが、その過程での話の聞き方、伝え方をどうするか、悩むことも多くあります。

その中で似たような思いをしたことが以前あったなと思い返してみたところ、大学在学中にソフトテニス部の部活でコミュニケーション力、とくに聞く力で悩んだことが思い起こされました。部活運営の中での学びが現在の自分の診療に大変に役立っていると感じます。

元々は私も非常に人の話を聞くのが苦手で、自身で結論を出しがちでした。下級生のころはどんどん視野が狭くなり沼にはまっていった時期が多く、その時は「こうすべき」といった考えに凝り固まっており、それによってかえって自分の首を絞めていたと思います。ある程度学年が上がり、部を引っ張る立場になりふと気づいたときに、皆の意見を聞きながらそれを消化して方向性を決めていこうと感じるようになりました。

当初は周囲も困惑したのではないかと今では思いますが、だんだんと意見も多く集まるようになり、同期、先輩、後輩の多くの考えに触れることができ



苦小牧出身、室蘭栄高校、旭川医科大学卒です。現在は医師3年目で、留萌市立病院循環器内科で専攻医1年目として勤務しております。小中高大とソフトテニス部に所属しておりました。写真は東医体での選抜対抗戦の一枚となります。

ました。それを消化したうえで部活として方向性を見出し、全員で楽しく、かつメリハリをつけて各種大会には全力で取り組むことを目標としていけたというのは自身の中では大きな変化でした。結果として、自身が主将として臨んだ東医体では個人、団体ともに入賞することができ、取り組んできたことの成果が出たのではと思います。

昨今は「ハイポ志向」に代表されるように、あまり部活などに一生懸命に取り組むこと自体が珍しくなってきたのかもしれませんが。インスタントな体験も多く、そしてそれが面白いため、短く端的に伝える媒体が急増しています。そんな現代において、大学生にまでなって努力して頑張ろうという風習こそ古いのかもしれませんが。ただ、部活に限らずとも試行錯誤して一生懸命に取り組んだ経験と、その過程こそが今につながっていると強く思います。今後とも医学的な知識をつけていくのは勿論のこと、チーム全体を巻き込んだ医療をできるよう、学びを深めて、医師として、という前に一人の人間として成長していければと思います。

とは言いましたが、ここ数年はCOVID-19蔓延の影響もあり部活をはじめ学生主体の活動にはかなりの制限がかかっていたことと思います。私たちが卒業旅行に行くかどうか…とためらっていたところが懐かしいですが、働いてからもその流れは続き、今もお全国的な終息の見込みがつきません。しかし、全国的にプロスポーツだけではなく中高生の大会なども行われてきており、「コロナ以前」の生活はもう少しと思います。後輩たちには以前のような活気のある活動ができるよう応援し、私自身もそろそろ現地学会にも足を運んだり、気兼ねなく旅行を楽しんだりできるようになればと期待しているところです。人と人との繋がりが以前のようにより豊かなものに戻れることを祈念しております。拙文ではございますが、最後までお読みいただき、ありがとうございました。